万葉がなで「難波津」の和歌
最古級、７世紀の木簡
「国守」国府の存在明らかに

徳島・観音寺遺跡

㊨万葉がなが書かれた木簡㊧「国守」の文字がある木簡＝いずれも徳島県埋蔵文化財センター提供

古代の国の地方行政機関「阿波国府」があったとされる徳島市国府町の観音寺遺跡で、古今和歌集の有名な「難波津（なにはづ）」の和歌と、中央から国府に派遣された国司（地方行政官）の長官を表す「国守」の文字が記された木簡が出土し、徳島県埋蔵文化財センターが四日、発表した。いずれも大宝律令（七〇一年）直前の七世紀末ごろのものとみられ、万葉がなの和歌や国守の文字が書かれた木簡の出土例としては最古級という。日本書紀でしかわからなかった律令制形成期の地方行政官制度や、当時の役人の勉強ぶりを知る手掛かりとして注目される。

同センターによると、木簡はいずれも国府跡推定地の七世紀末の層から見つかった。

和歌の木簡は長さ十六㌢、幅四・三㌢。古今和歌集の撰者の一人である紀貫之が万葉がなを習う人の手本として、古今和歌集の序文に引用した歌の一部「難波津に咲くやこの花……」が、万葉がなで「奈尓波ツ尓作（佐）久矢己乃波奈」と墨書されていた。当時の下級役人も万葉がなの手習いに用いていたと推定できることから、同センターは律令制形成期の地方の役人の勉強ぶりを示す貴重な史料という。

万葉がなの和歌はこれまで、奈良県斑鳩町の法隆寺五重塔でみつかった八世紀初めの天井坂の「落書き」が最古とされていた。

また、「国守」の文字がある木簡は、長さ二十七・二㌢、幅五・二㌢。「板野国守大夫分米三升小子」と墨書され、国守のために米三升が支給されたことを示しているという。この時期の地方行政機関を表す文字としては、奈良県橿原市の藤原京（六九四～七一〇年）の跡から、国府の下部機関である「評（こおり）」の文字などを記した木簡が出土しているが、国府の存在を明瞭に示す七世紀の文字史料は初めて。

（朝日新聞　１９８９．１１．５　朝刊　１面　１３版　より転載　記事の一部を訂正加筆しました）